
目指す地位は縁の下。

ビス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指す地位は縁の下。

【NZコード】

N6841Y

【作者名】

ビス

【あらすじ】

異世界に飛ばされた女子高生、相馬沙羅は、彼女そつくりな貴族の令嬢の身代わりとして後宮入りする事に。

彼女の目下の悩み事は、後宮から逃げる事でも、後宮の一一番になる事でも、日本に帰る事でも無く、大好きな皇帝陛下を、どうしたら幸せに出来るか?だつた。

美人な奥様方が仲良しだったなら、彼もきっと嬉しい筈!と、自分磨きそっちのけで、側室達の間を取り持つ事に奔走する健気な天然少女の話。

プロローグ

私は今、とても悩んでいます。

あ、申し遅れました。私の名は相馬 沙羅。（ヒコマ サラ）一介の女子高生トリッパーです。

若干妖しい語感な気がするのは、気のせいです。

軽く言つてはいますが、異世界に飛ばされた当初は、本当に驚きました。

友達と夏休みに遊園地へ行つて、逆バンジーにチャレンジ。怖くてさめやうつと瞑つていた田を開けたら薄暗い路地裏にいた。ありえん。普通…いや、異世界トリップに普通の定義があるかは知らないが、セオリーとしては落ちるモンなんじゃないの。飛んだり異世界つてどんな新境地だ。

そして私が消えた後のバンジーの「Gム」の行方が気になる。昔懐かしのコントの様に誰か、ぱっさんされてないといいけど。

とにかく、不本意ながらトリップしてしまった私は、当然の事ながら訳が分からなかつた。先ずは自分の頭を疑つた。

でも夢や幻にしては、色々な事がリアルで。

薄汚れた壁に貼られた、色褪せたポスターに書かれた、不可思議な文字。

湿つた土の上に、無造作に置かれた樽の影から這い出す、見たことがない形の虫。

夏休みだった筈なのに、肌をさす様な冷氣と、嗅いだ事の無い、えた様な臭い。

五感が私に訴えた。

此処は私が生きていた場所では無い、と。

混乱し、恐慌した私は、その場から一歩も動けずに、震えていた。寒さと、恐怖に。

で、気が付いたら攫われてた。

あ。この辺前振りなんで、色々サクサク進みます。

その時の私の恐怖や憤りは、取り敢えず今は置いておきましょう。

攫われた私の行き先は、奴隸市場か娼館だらうと予想していました。

お先真っ暗です。

見ず知らずの狸親父に好き放題される位なら…と蒼白になりながら

覚悟を決めたのですが、私のついた場所は、どちらでもありませんでした。

其処は豪華なお屋敷で、どうやら貴族のお宅の様です。

でもまだ狸親父に売り扱われる可能性が消えた訳じゃない、と警戒する私の前に現れたのは、壯年の男性とその妻らしき女性でした。

因みにダンディーなおじさまでした。奥様は清楚な美人。

妻公認で人身売買とか流石に無いと思うのでセーフ。と私は漸く安堵しました。

安堵したのも束の間、夫婦に抱き締められた。何のプレイだ。

離して下さいとパニくる私に、一人は驚いた顔になり恐る恐る『サラ』じゃないの?と訊ねた。
惜しい、『セ』が多い。

彼らは驚き、そして悩んだ後、私にお願いがある、と言つた。

そのお願いとやらをザックリ纏めると、彼らはどうやら私に、娘の身代わりになつて欲しいらしい。

数日後に嫁入りを控えた彼らの娘が、今日突然いなくなつたそつだ。

結婚が嫌で家出とか黄金パターンだよな、と大層不謹慎な事を考えてしまつたが、娘は割と乗り気だつたらしい。

急に雲隠れしてしまつた娘に、彼らは蒼白。

嫁ぎ先は彼らより身分が上。今更此方側から撤回なんて出来ない。

何とかして娘を捜し出すとした所、娘そつくりの私を発見。
勘違いで攫つてきてしまつた。

：あれ。何かそれ違う黄金パターンな気がする。
娘今ごろ逆バンジーされてませんか？私の代わりに富士山見ながら
空舞つてませんか？？

そうなると、娘さんを捜し出すのは不可能に近い気がするし、私も
娼館行きは遠慮したいので、身代わりで嫁入りを決意しました。

この世界で頼る人もいませんし、どうやつたら元の世界に帰れるか
なんて全く分からぬし、取り敢えずやるやだけやつてみましょ。

ところで貴族の奥さんつてなにすりやいいの。
と、早速躊きましたが、正確には貴族の奥さんじやありませんでした。

嫁ぎ先は、

なんと王様。

……色々あり得無れやせやしませんか。

側室（仮）の悩み。

「…どうかなさいましたか？サラサ様。」

窓辺に置かれた椅子に腰掛け、ぼんやりと空を見上げていると、気遣わしげな声がかけられた。

緩やかに波打つ栗色の髪、長い睫毛に縁取られたつぶらな瞳。ビスクドールの様な美少女は、心配そうに私を見つめている。

「大丈夫よ、カンナ。心配してくれてありがとう。」

カンナは、『サラサ』の実家からついてくれたメイドさんだ。此方の世界の常識を知らない私をフォローする為、父母（仮）がつけてくれた娘なので、私が相馬沙羅である事も知っている。

本当のお嬢様では無い私を、気遣い過ぎる位気遣ってくれるカンナを心配させたくないで無理矢理笑顔をつくるが、カンナは余計心配そうな顔になつた。

それでもカンナは、それ以上突っ込む事はしない。さりげない形で私を慰めてくれる。

「…珍しい茶葉が手に入ったのですが、気分転換にいかがですか？」

「わあ、楽しみ！カンナのいれてくれるお茶、凄く美味しいから。」

「光榮ですね。では早速」用意致します。」

ウフフ、と少し照れた様な微笑を浮かべたカンナが部屋を出て行くのを見送り、私はフウ、とため息をついた。

…ダメだなあ。カンナに心配かけちゃうなんて。

でも冒頭で記した様に、此処最近私はずっと悩んでいるのだ。

ちなみに結婚する事に対する悩みじゃない。
てゆうか、もうとっくに結婚したし。

此處、後回ですから。

私はこの國…鴻國^{こうこく}の皇帝陛下の…えっと何番目だったかな…確か
15？番田へりこの側室となりました。

数日でこの世界の色々な事や、貴族の子女としての礼儀作法その他

諸々を詰め込まれ、半ば朦朧としている内に、気が付いたら此処にいた。どんだけショートしてたんだ自分。

…で、肝心の旦那様ですが……びっくりする位、格好良い人でした。

黒髪黒目のワイルド系で、私の好みど真ん中…！神様ありがとう…！
ですが格好良すぎて直視出来ません…！

アイドルだつて、遠くから眺めてキャイキャイ騒いでのが楽しい
んです。間近で旦那を見て鼻血出しそうになる妻とか、無いだろ…。

しかも旦那様は、凄く優しい方でした。

詰め込み学習のせいで、ろくに働かない頭のまま後宮入りして、そ
の日の夜が初夜とか…流石にキツかった。

泣きそうになりながらも、拒否なんて許され無い事は分かつていて
から、蒼白な顔のまま、私はずっと俯いていた。

夜に後宮に渡つてきた皇帝をお迎えし、さあ覚悟を決めろ私、と腹
を括つたところ、皇帝は私を見て苦笑した。

ちんけな小娘を馬鹿にする笑いでは無く、困ったような微笑み。

寝台に腰掛け、近くのテーブルに用意してあつた酒瓶とグラスを手に取つた皇帝は、固まつた私を手招きし、自分の隣をポンポン叩き座れと示した。

酌を頼む、と酒瓶を渡され、私は慌ててグラスにお酒を注いだ。

皇帝はガラスの器を目で楽しむ様に数回揺らす。

薄暗い灯りの中でも美しい玻璃は、色鮮やかで、昔旅行先で見つけた薩摩切子を思い出した。

私がぼんやり見ている先、鼻先で香りを確かめた皇帝がお酒に口を付けようとしたところで、私は我に返る。
慌てて皇帝を止めた。

今思えば不敬過ぎるが、あるシーンが思い浮かんだのだ。
後宮とか皇帝とか遠い世界過ぎるけど、小説の中ではよく聞く『毒味』。

……毒味とか、正直怖い。でも、目の前にいる人は、私なんかと違つて、替えのきかないたつた一人のひと。

震える声で『私が先に』と申し出ようとしたが、皇帝は、優しい笑みで私の髪を撫で、そのまま酒を呷った。

いわく、毒には耐性があるから大抵のものは、彼にはきかないそうだ。

後、色やにおい、ついでにカンで分かるらしい。

……カンで。

脱力した私は、だいぶ緊張もほぐれ、その後朝まで皇帝とお話していた。

……アハンな事は一切ありませんでした。

初訪問は、そういう事はしないのかな?と思っていたが、どうやら蒼白だった私を哀れに思つた皇帝が見逃してくれた様です。

彼は朝帰る前に、自分の指に傷をつけ、寝台に血痕を残していったから。

お役目を果たせなかつたと、私が責められないように。軽んじられないように。

……ジャスト好みな男性に、そんな優しい扱い受けて、惚れない女の子なんている?

私はまんまと惚れましたよ。

まさかの異世界で、旦那様に片想い中です。

…でも、旦那様には既に10人以上の美しい奥様がいます。
咲き誇る薔薇の様な彼女らに比べたら、私は野草…いや雑草。

恋の成就は早々に諦めました。

でも、あの方の為に何かしたい。

私はずっと、皇帝の為に何が出来るかを悩んでいました。

02 (前書き)

お気に入り登録して下さった方々、ありがとうございます m(ーーー)

m

凄く励みになります！

数日悩んで、カンナを心配させていた私ですが、気分転換にと庭へと散歩に出た日、ある事に気付いたのです。

東屋から、咲き誇る花々を眺めのんびりと過ごしていた私は、視界の端に回廊を歩く貴妃の姿をとらえました。

数人の侍女をつれ、回廊を進んでいるのは、楚々とした美少女。お名前は確か…シャロン様、とおっしゃったか。

鴻国の大藩の第三王女…そう、正真正銘のお姫さまなのだ。

初めてお会いした時はあまりの可憐さに、大人しやかな美少女…！リアルプリンセス…とひそかに興奮してしたりした。

(…ん?)

ゆつたりと回廊を歩いていたシャロン様は、何かに気付いた様に顔を強張らせ、足を止めた。

彼女の視線を辿り、前方に目を向けると、違う貴妃が歩いてくるの

が見える。

沢山の侍女の先頭を、堂々とした様で歩くのは、華やかでキツめの美女。

鴻国の有力貴族の令嬢…アズミ様。

彼女は、シャロン様に気付いたようだが、全く歩調を緩めずに歩く。逆にシャロン様は、廊下の端へと寄ってしまった。…完全に負ける。

怯える様に俯くシャロン様を、アズミ様は一瞥し、馬鹿にする様に鼻を鳴らす。

…いくら王女様といえど、藩属国のかな国第三王女。

しかも彼女自身、とてもか弱く大人しい方なので、余計に侮られてしまう。

アズミ様が去った後、シャロン様はお付きの侍女の制止を振り切り、泣きながら駆けて行つた。

…たぶん擦れ違つた時に、なにか言わたんだろうな。15くらいの少女が、あんな百戦錬磨っぽいお姉さんには勝てないよね。可哀想に。

…見ての通り、後宮の貴妃同士はとても仲が悪い。

まあ後宮とは、皇帝の寵を得る為に競い合つ女の戦場だから、当たり前といえば当たり前なんだけど。

でもむ、折角こんなに美姫が集まってるのに、喧嘩ばっかりじゃ、皇帝陛下だって癒されないんじゃないかな。

自分の奥さん達が、仲良じで一いつ口口しててくれた方が、絶対嬉しいよね！

私は知らず知らずの内に、テーブルの上で手のひらを握り締めていた。

ずっと、後ろに控えていてくれたカンナが、気遣わしげに声をかける。

「……サラサ様？」

「…カンナ。」

「はい？」

振り返った私の顔を見て、カンナは目を瞠つた。

今まで意氣消沈していたのが嘘の様に、ニシコリと笑う私に、カンナは瞠つていた目を笑みの形に細める。

「私、決めた！」

「はい。」

何を決めたのかも言つていないので、カンナは穏やかに笑んだ。

お元気になられた様で、よつばございました。と私が元気になつた事のみを喜ぶ。

会話のキヤツチボールが成り立つていかない氣もするが、良い侍女に恵まれたなあ、私。

「カンナ、私ね…縁の下の力持ちになるわ！」

大好きな皇帝陛下の為に、何か出来ないかとずつと悩んでいた。

美しい貴妃達の様に、彼の目を楽しませる事も出来ず、
教養ある貴妃達の様に、彼の興味のある話も出来ない。

詩歌や楽器など、雅やかな趣味も無く、私は彼の為に何も出来る事が無いと落ち込んでいたけれど…

彼が後宮に来た時に、癒される様、煩わせる事が無い様に、

私は、お姫様達を仲直りさせよ。

彼女達には色々な目的や責務があるから、それは簡単な事じゃない
だろ？けれど、

それでも、少しでも歩み寄れる様に、私が頑張る。

彼女達が、憂い無く咲き誇れる様。

彼女達が、皇帝陛下を満たし癒せる様に、

私には、私にしか出来ない事がある筈。きっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6841y/>

目指す地位は縁の下。

2011年11月22日05時20分発行